

各関係機関団体の長 }  
各病虫害防除員 } 殿

福岡県農林業総合試験場長  
(福岡県病虫害防除所)

技術情報第16号

キャベツの菌核病・黒腐病について

キャベツの菌核病については、12月3半旬の予察調査では発生が少ない状況でしたが、12月が高  
温、曇雨天傾向で推移したため、1月3半旬の予察調査では、ほとんどの調査地点で多発していまし  
た。また、黒腐病についても、一部の調査地点では多発していました。

冬キャベツについては、収穫が終盤に入りつつありますが、次作で多発させないよう、十分な対策  
をとりましょう。

1 対象作物名：キャベツ

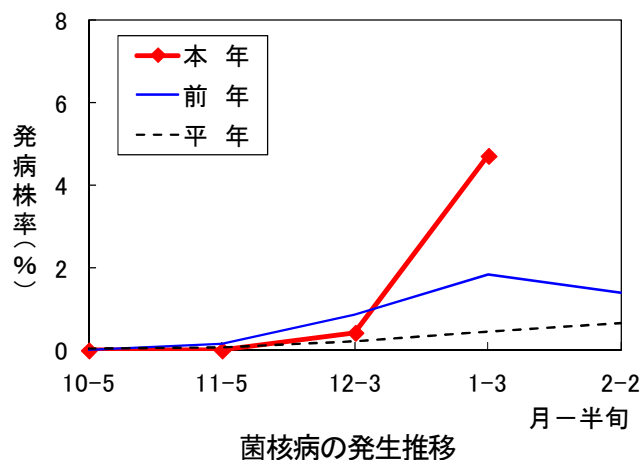
2 病虫害名：菌核病、黒腐病

3 発生状況

(1) 菌核病

1月3半旬調査の結果、発病株率は4.7%、発生ほ場率は85.7%であり、平年より高く、比較  
的多発した前年より、さらに高かった。

- ・ 1月3半旬の発病株率 **4.7%** (平年 0.4%、前年 1.8%)
- ・ 1月3半旬の発生ほ場率 **85.7%** (平年 13.3%、前年 50%)

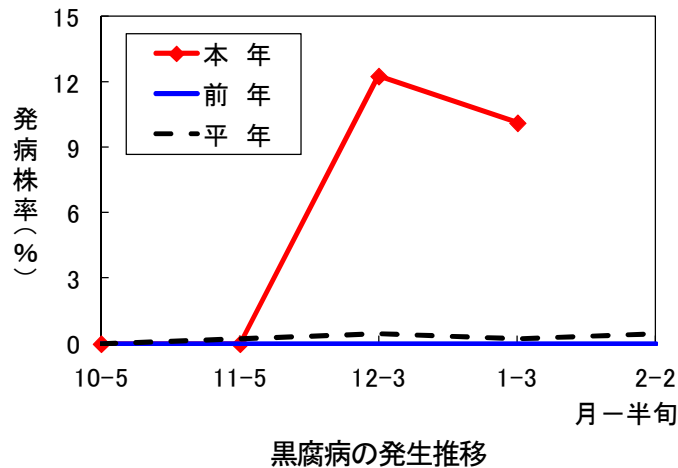


(2) 黒腐病

1月3半旬調査の結果、発病株率は10.1%、発生ほ場率は57.1%であり、平年・前年より高  
かった。

- ・ 1月3半旬の寄生株率 **10.1%** (平年 0.2%、前年 0%)

・ 1月3半旬の発生ほ場率 57.1% (平年 6.1%、前年 0%)



#### 4 防除上注意すべき事項

##### (1) 菌核病

###### ア 生態

- ①病原菌は、被害部に生じる菌核によって越冬する。菌核は、畑土壌中では2～3年生存するが、湛水中では速やかに死滅する。
- ②菌核は、春もしくは秋に発芽して、キノコ状の子のう盤を形成する。子のう盤には多数の子のう胞子が生じ、この子のう胞子が飛散して、一次感染が起こる。
- ③子のう盤の形成には、適度な水分と15～20℃くらいの適温が必要である。このため、秋冬作では、通常11～12月に雨が多いと多発する。しかし、暖冬の年には1～2月にも多発する。

###### イ 次作に向けての防除対策

- ①本年度の多発は、気象的な要因に加え、前年度に多発した際の菌核が、土壌中に多数残っていたことが原因と考えられる。水稻を作付けするか、夏季に湛水すると、菌核を減らし被害を軽減できる。
- ②収穫終了後は、春季の子のう盤形成適期になる前に反転耕を行い、菌核を5～10cm以上の深さに埋没させると、子のう盤の形成を抑えることができる。
- ③前作での発生状況や当年の気象状況から、多発が予想される場合には、結球初期から予防的に薬剤散布を心がける。なお、薬剤散布は、初発部位である株元に十分かかるように行う。

##### (2) 黒腐病

###### ア 生態

- ①細菌病であり、種子および土壌伝染する。種子の発芽の際、子葉頂部のくぼんだところにある水孔から侵入する。また、降雨とともに土がはね上げられて、葉縁の水孔や傷口から侵入する。自力で植物体内に侵入することはできない。
- ②生育適温は30～32℃で、風雨や中耕、除草等により植物体が傷ついた場合、発生が多い。
- ③罹病残渣に付着し、土壌中で生存する。乾燥状態では1年以上生存する。

###### イ 次作に向けての防除対策

- ①発病地では、2年以上アブラナ科以外の作物を輪作すると、菌を減らし被害を軽減できる。
- ②抵抗性品種を導入する。
- ③土壌水分が多いと菌が繁殖しやすいので、排水の良い土壌を作るよう心がける。
- ④苗の時点で発病が認められた株は、早急に抜き取り処分する。
- ⑤植物体の傷の部分が濡れると感染しやすいので、台風、大雨後の薬剤散布を心がける。また、露の多い早朝や雨天時は、管理作業を避ける。
- ⑥害虫の食害痕も菌の侵入経路となるので、チョウ目、コオロギ等の食葉性害虫の防除を徹底する。

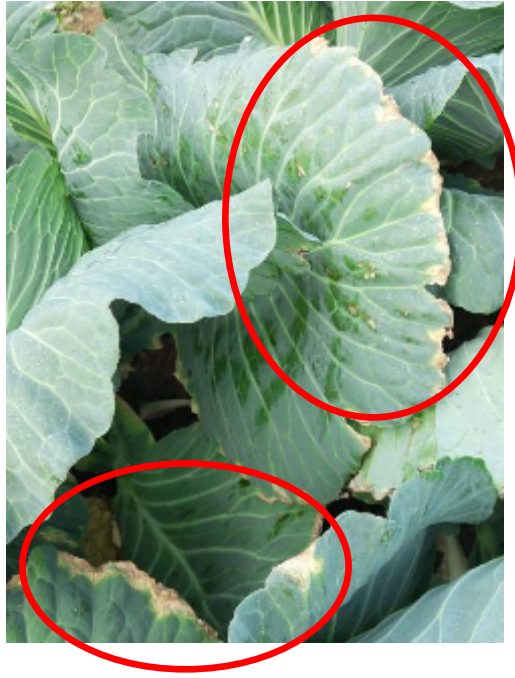


株元の初期病徴



結球部に形成されたネズミの糞状の菌核

菌核病の病徴



黒腐病の病徴